

平成23年度特定外来生物生息分布調査結果について

1 調査の目的

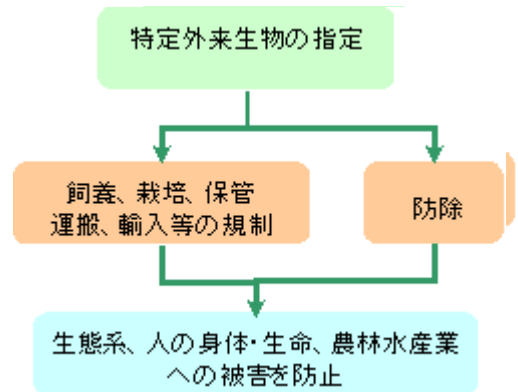
特定外来生物（※）による生態系、人の生命・身体、農林水産業への被害を防止し、生物の多様性の確保、人の生命・身体の保護、農林水産業の健全な発展に寄与することを通じて、国民生活の安定向上を目的に、平成17年6月に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（以下、外来生物法という。）」が施行された。現在、この法律で特定外来生物として指定されているものは105種類（平成24年4月1日現在）あり、その飼養、栽培、保管、運搬、輸入といった取扱いを規制し、特定外来生物の防除等を行うこととしている。

特に、アライグマ、ヌートリアについては、県内の多数の市町村において同法に基づく防除が実施されているところである。

今回の調査は、平成18年度に行った調査との分布変化を把握することを目的とし、生息・生育域が拡大している「重点調査種」を中心に特定外来生物の生息・生育状況を調査することにより、特定外来生物の県内への進入・拡散状況について最新の状況を把握し、今後の施策等に役立てるための基礎データとして活用する。

※特定外来生物とは、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律第2条の規定により、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼしたり及ぼすおそれのある外来生物（侵略的外来種）の中から、規制・防除の対象とするものを指す。

～ 外来生物法の概要 ～



※環境省HPより

外来生物が引き起こす3つの悪影響（参考）

1. 日本固有の生態系への影響



2. 人の生命・身体への影響



3. 農林水産業への影響



※環境省HPより

2. 調査の概要

市町村、漁業組合等の関係団体に対し、捕獲、目撃等により生息が確認された地点をアンケート形式で調査した。収集した生息情報（捕獲・目撃情報を指す。以下、生息情報という。）については、「県域統合型GIS」を活用し、「特定外来生物生息分布マップ」に反映した。

○平成22年、23年度内に目撃または確認した地点

アライグマ、ヌートリア、オオクチバス、ブルーギル、オオキンケイギク、アレチウリ

○平成19年から平成23年度内に目撃または確認した地点

カミツキガメ、コクチバス、セアカゴケグモ、その他の外来種

3. 調査対象の特定外来生物

環境省で指定した特定外来生物 105 種類について調査を実施した。

また、国内での定着が確認されており、生態系への影響のほか、人に危害を与えたり、農林水産業に影響のあるとされる以下の種を「重点調査種」として、重点的に情報を収集した。

哺乳類 : アライグマ、ヌートリア

爬虫類 : カミツキガメ

魚類 : オオクチバス、コクチバス、ブルーギル

無脊椎動物 : セアカゴケグモ

植物 : オオキンケイギク、アレチウリ

重点調査種

4. 調査対象地域

岐阜県全域について調査

5. 調査実施期間

平成23年8月31日 から 平成23年10月31日 まで

6. 調査の内容

アンケート調査による。

(1) アンケート調査の対象者

アンケート調査の被対象者は、その土地に詳しい以下の者（団体、個人）とした。

市町村（42）、森林管理署（3）、猟友会各支部（28）、森林組合（20）、農業協同組合（7）、漁業協同組合（32）、河川環境レンジャー（243）※河川環境レンジャーは県で委嘱

計 132 団体、243 名

(2) アンケート調査内容

調査対象種について、目撃・捕獲などの位置情報を収集した。

アンケート内容：特定外来生物の種名、情報の種別（捕獲・目撃）、情報を確認した年度

7. 調査結果

(1) 生息情報が寄せられた特定外来生物

平成18年度(※)及び平成23年度の調査により、県内での生息情報が寄せられた特定外来生物は、以下の種類であった。

哺乳類：アライグマ、ヌートリア、台湾リス

鳥類：ソウシチョウ

爬虫類：カミツキガメ（野外での定着は確認されていない。飼育個体が遺棄されたものと考えられる。）

両生類：ウシガエル

魚類：オオクチバス、コクチバス、ブルーギル、チャネルキャットフィッシュ、カダヤシ

昆虫類：アルゼンチンアリ

無脊椎動物：セアカゴケグモ

植物：(陸生) オオキンケイギク、オオハンゴンソウ、オオカワヂシャ、アレチウリ

(水生) ボタンウキクサ、オオフサモ、アゾルラ・クリスタタ

下線は重点調査種を示す。

※平成18年度特定外来生物生息分布調査結果（平成19年2月地球環境課）

(2) 生息情報数

「種類別の生息情報数と情報提供者の内訳（表1）」に示したとおり、本調査で収集した生息情報数は、総数で2,642ポイント（地図上の地点数でカウント）であった。

アライグマは、有害鳥獣捕獲を実施している市町村からの生息情報数が74.3%を占めた。ヌートリアの生息情報数は、市町村が48.3%を占めたほか、農業協同組合が18%、猟友会が12.4%を占めた。魚類（オオクチバス、コクチバス、ブルーギル）に関しては、漁業組合からの情報が主であり、オオクチバスの47.1%、コクチバスの76.9%、ブルーギルの42.9%を占めた。オオキンケイギクの生息情報数は、市町村が58.5%、防除計画を確認した県土木事務所が22.2%を占めたほか、河川環境レンジャーが18%を占めた。アレチウリの生息情報数は、市町村が80.6%を占めた。

また、平成20年度から平成21年度にかけて、木曽川河川敷でセアカゴケグモの繁殖が2件確認された。

「重点調査種の生息確認の状況（表2）」に、「捕獲」「目撃」「防除」「その他」の状況を示した。

動物種については、全体の総数が平成18年度（表3）の1513ポイントから992ポイントへと減少した。これは、各市町村が防除実施計画を策定し、一定の捕獲体制が確立されたことで、生息事態の問題意識が平成18年度当時よりも低下したものと考えられる。

植物種については、オオキンケイギクは全体の総数が平成18年度の19ポイントから1413ポイントに、アレチウリは28ポイントから237ポイントに大きく増加した。

(3) 平成18年度調査結果からの分布変化

アライグマは、岐阜地域（岐阜市、各務原市、山県市）、西濃地域（大垣市）、中濃地域（可児市、美濃加茂市、坂祝町、関市）、東濃地域（多治見市、恵那市）を中心に目撃情報が寄せられた。前回の調査結果と比較して、西濃地域西部・中濃地域北部・東濃地域東部において、目撃地点が河川上流域へ7km～15km程度移動している。

ヌートリアは岐阜地域（岐阜市、瑞穂市、羽島市、本巣市）、西濃地域（養老町、池田町、輪之内

町)、中濃地域(可児市、関市)、東濃地域(多治見市)を中心に目撃情報が寄せられた。前回の調査結果と比較して、西濃地域西部・中濃地域北部・東濃地域東部において、目撃地点が河川上流域へ5km~12km程度移動している。ヌートリアは水辺に巣を作る習性があり、河川に沿って移動するため、目撃情報は長良川、木曽川、揖斐川を中心とした河川域及び用水路等に集中している。

また、アライグマ・ヌートリアは毎年一定数が県内市町村で捕獲されており、今回の調査結果と合わせて、県内での生息域の拡大が認められた。

カミツキガメについては、岐阜県南部の河川沿いに見られ、平成18年調査では過去3年間で8件の情報が寄せられたが、平成23年度調査では2件に減少した。

オオクチバス・コクチバスについては、平成18年度よりも目撃範囲が拡大し、飛騨地域(高山市)での目撃情報が寄せられた。

ブルーギルについては、平成18年度よりも目撃範囲が拡大し、東濃地域(恵那市、中津川市)及び飛騨地域(高山市)での目撃情報が寄せられた。

オオキンケイギクについては、平成18年度調査以降、県内全域で生育域を拡大しており、平成23年度調査では飛騨市の富山県境まで達していることが確認された。

アレチウリについては、平成18年度調査以降、県内全域で生育域を拡大している。

オオキンケイギク・アレチウリともに生育状況に地域差が見られるが、県内全域に生育域を拡大していると推測される。

【表1】 種類別生息情報数と情報提供者の内訳

単位:ポイント

特定外来生物	総数	情報提供者の内訳								
		市町村	森林 管理署	森林 組合	JA	猟友会	河川環境 レンジャー	漁業 組合	NPO	県
アライグマ	382	284	0	4	41	20	17	13	0	3
ヌートリア	356	172	0	7	64	44	31	33	0	5
カミツキガメ	3	1	0	0	0	0	1	0	0	1
オオクチバス	104	29	0	2	6	4	9	49	0	5
コクチバス	26	4	0	0	0	0	0	20	0	2
ブルーギル	119	44	0	2	3	6	10	51	1	2
セアカゴケグモ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
オオキンケイギク	1413	827	0	10	0	4	255	4	0	313
アレチウリ	237	191	0	1	0	1	9	2	0	33
計	2,642	1,552	0	26	114	79	332	172	1	366

※重点調査種のみ(その他の種を除く)

【表2】 種類別の生息確認の状況

種類別の生息確認の状況						単位:ポイント
特定外来生物 (動物)	総数	捕獲	目撃	防除	その他	
アライグマ	382	108	274	—	0	
ヌートリア	356	102	252	—	2	
カミツキガメ	3	3	0	—	0	
オオクチバス	104	21	83	—	0	
コクチバス	26	1	25	—	0	
ブルーギル	119	31	88	—	0	
セアカゴケグモ	2	2	0	—	0	
計(動物)	992	268	722	—	2	
(植物)						
オオキンケイギク	1413	-	1110	302	1	
アレチウリ	237	-	162	75	0	
計(植物)	1650	-	1272	377	1	
合計	2,642	268	1,994	377	3	

※重点調査種のみ(その他の種を除く)

【表3】 調査年度の総数比較


特定外来生物 (動物)	単位:ポイント 総数	
	H18	H23
アライグマ	642	382
ヌートリア	680	356
カミツキガメ	8	3
オオクチバス	87	104
コクチバス	6	26
ブルーギル	90	119
セアカゴケグモ	0	2
計	1513	992
(植物)		
オオキンケイギク	19	1413
アレチウリ	28	237
計	47	1650
合計	1560	2642


H18年度総数:H13年度以前からH18年度

H23年度総数:H19年度から平成23年度


(3) 重点調査種の生息分布状況等

<哺乳類>


	アライグマ		原産地：北米
	特徴	体重 4～10 数 kg、頭胴長 41～60cm、尾長 20～41cm。白色の顔に黒色系のマスクを着けたような外見で 4～7 の輪模様を尾に持つ。	
	定着実績	愛知県（1962 年）での確認後、80 年代までに岐阜県・北海道・和歌山県・神奈川県等で野生化および自然繁殖が確認されている。	
	分布状況	【図 1 - 1】、【図 1 - 2】参照	
県内での生息状況等	<p>アライグマは繁殖能力が高く、移動が容易な場所（山野が広がっており、主たる市街地・幹線道路がない地域）であれば数年で 50 km～100 km 範囲にわたって生息地域を拡大する。</p> <p>雑食性であり、農作物被害の他、犬など飼育動物への被害、庭の観賞魚の食害、家屋の侵入による壁や屋根の破損、騒音・悪臭被害などの生活被害が相次いで報告されている。</p> <p>近隣自治体や地域住民に対する積極的な出現情報の収集を行い、生息が確認された場合は早急にアライグマ防除計画の策定を行い、対策を取ることが被害低減への最善の対策である。</p>		


	ヌートリア		原産地：南米
	特徴	体重 6～9 数 kg、頭胴長 50～70cm、尾長 35～50cm。猫ほどの大きさの巨大ネズミ。川や池など水辺に生息する。土手などに穴を掘って巣にする。	
	定着実績	国内では、岐阜県、愛知県、三重県、京都府、兵庫県、島根県、広島県、岡山県、香川県などに分布している。	
	分布状況	【図 2 - 1】、【図 2 - 2】参照	
県内での生息状況等	<p>夜になると田畑に侵入し、稲（特に 6 月頃の若稲）、野菜（キャベツ、サツマイモ、トウモロコシ、ジャガイモ、カボチャ、ナスなど）、果物（スイカなど）、麦などを食い荒らす。</p>		

<爬虫類>

	カミツキガメ		原産地：北米から中米
	特徴	4 亜種に分けられているが、北米産の亜種では背甲長約 50cm、34kg まで成長する。最長寿命は 80 年。産卵数は一度に 11～83 個と非常に多い。	
	定着実績	千葉県印旛沼周辺では自然繁殖が確認されている。他の地域でも時々発見されている。	
	分布状況	【図 3】参照（野外での定着は未確認。飼育個体の遺棄と見られる捕獲情報を図示する。）	
県内での生息状況等	<p>野外での定着は確認されておらず、ペットが遺棄された可能性がある。移動距離は年間数 100m ほどであり、現在のところ、生息場所が県内全域に広がる可能性は低い、攻撃的で人への危害が懸念されるため、発見時には速やかな防除を行う。</p>		


<魚類>

	オオクチバス		原産地：北米
	特徴	小魚、陸生昆虫などを食べる肉食性の魚で、全長 50 c m 程に成長する。上あごの後端は目よりも後方に達する。温水性魚類で、湖沼や河川の淀みなど流れのない水域に生息する。	
	定着実績	1970 年代以降、国内でも急速に分布が拡大し、1988 年には 45 都府県にて生息が確認された。	
	分布状況	【図 4-1】、【図 4-2】参照（他の地域にも生息していると考えられるが、今回の調査で寄せられた情報のみを図示する。）	
県内での生息状況等	在来種の食害による生態系への影響が懸念される。		


	コクチバス		原産地：北米
	特徴	小魚、陸生昆虫などを食べる肉食性の魚で、全長 40 c m 程に成長する。上あごの後端は目よりも後方には達しない（口が小さい）。冷水性魚類で、流れのある所や水温の低い水域でも生息できる。	
	定着実績	1990 年に長野県の野尻湖で発見された後、各地で生息が確認されている。県内では、最近、伊自良湖で生息が確認されている。	
	分布状況	【図 5-1】、【図 5-2】参照（他の地域にも生息していると考えられるが、今回の調査で寄せられた情報のみを図示する。）	
県内での生息状況等	在来種の食害による生態系への影響が懸念される。		


	ブルーギル		原産地：北米
	特徴	全長 25cm。エラ蓋にある青い丸い部分が、青いエラ（ギル）という名の語源。子供の時は、体側に 7~10 本のしま模様のはっきりしているが、成長するにつれて薄くなる。	
	定着実績	ほぼ全国的に広範囲に分布している。	
	分布状況	【図 6-1】、【図 6-2】参照（他の地域にも生息していると考えられるが、今回の調査で寄せられた情報のみを図示する。）	
県内での生息状況等	在来種の食害による生態系への影響が懸念される。		

<無脊椎動物>

	セアカゴケグモ	原産地：オーストラリア
	特徴	<p>成熟した雌の体長は、約7～10mmで全体的に黒色（老熟すると黒褐色）である。雄は約4～5mmの大きさで腹部が細く、触肢が丸くなっており、茶褐色である。セアカゴケグモの背中には、中央に赤色の縦すじ模様があり、腹部の裏面には四角あるいは砂時計型の赤色の模様が見られる。</p>
定着実績	<p>平成7年11月に大阪府で国内で初めて発見された後、群馬県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県、岡山県、山口県、沖縄県で定着が確認されている。定着地域からコンテナ等の輸送物資に付着して移動するケースが多い。</p>	
分布状況	【図7】 参照	
県内での生息状況等	<p>平成17年5月に各務原市で1匹確認された他、平成20年5月には愛知県愛西市木曾川河川敷で、平成20年6月及び平成21年4月に海津市木曾川河川敷で生息が発見された。人への危害が懸念されるため、発見後は速やかに防除を行うとともに、周辺住民への注意喚起を行う必要がある。</p>	

<植物>

 <p>提供：財団法人 自然環境研究センター</p>	オオキンケイギク	原産地：北米
	特徴	<p>キク科の多年生草本で、高さは0.3～0.7m程度である。温帯に分布する。路傍、河川敷、線路際、海岸などに生育する。開花期は5～7月。頭状花。虫媒花。瘦果をつける。</p>
	定着実績	1880年代観賞用、緑化用に導入。全国的に逸出している。
	生育状況	【図8】参照（他の地域にも生育していると考えられるが、今回の調査で寄せられた情報のみを図示する。）

 <p>提供：財団法人 自然環境研究センター</p>	アレチウリ	原産地：北米
	特徴	<p>ウリ科の一年生草本である。生育速度が非常に速いつる性植物で、長さ数～十数mになる。群生することが多い。果実に鋭い棘を密生する。温帯～熱帯に分布し、林縁、荒地、河岸、河川敷、路傍、原野、畑地、樹園地、造林地などに生育する。開花期は8～10月。雌雄同株。1株当たり400～500個の種子をつけるが、25,000個以上との報告もある。</p>
	定着実績	近年では全国の飼料畑や河川敷で多くみられる。
生育状況	【図9】参照（他の地域にも生育していると考えられるが、今回の調査で寄せられた情報のみを図示する。）	

8. まとめ

今回の調査において、多くの特定外来生物が平成18年度よりも生息地域を拡大していることが確認された。特に、アライグマやヌートリアについては、多くの農業被害が報告されており、防除計画を策定しているものの被害の低減が見られず、対応に苦慮しているところである。

また、平成20年から21年には木曾川河川敷においてセアカゴケグモの生息（複数個体・卵のうを確認）が2件確認されている。グローバル化による産業・交通網の発展により、コンテナ等に付着した外来生物の侵入が危惧されており、慎重に対応を行う必要がある。

その他の特定外来生物の侵入事例として、平成19年3月13日、各務原市において県内で初めてアルゼンチンアリの発生が確認されている。アルゼンチンアリは攻撃性が強く、在来アリのほぼ全種を駆逐し、生息地域に巨大なコロニーを形成する。県は、市や専門家の協力を得て生息状況を確認し、速やかに駆除を実施するとともに、地域住民への普及啓発を実施した。その後、数回にわたり生息状況を調査した結果、生息域の拡大は認められていないが、アルゼンチンアリの生態については不明な点が多く、防除方法も確立されていないため、現状では化学的防除（薬剤散布）に依存しており、いまだ警戒が続いている状況である。

この事例のように、特定外来生物が国内に定着した場合、完全な駆除は非常に困難であり、侵入を未然に防ぐことが最優先事項であることは言うまでもないが、発見時には早急な対応が求められるため、通常から市町村、各関係機関との情報共有が肝要である。

また、外来種の侵入防止及び防除に関しては、県民の協力が必要不可欠であり、今後も各種事業を通じて普及啓発を行うとともに、情報共有についても県内GISシステム等を通じて推進を図っていく。